

3 になる社会

1 + 1 が

敵だね!

素

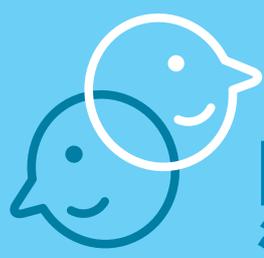
コラボレーション

協働

..... c o l l a b o r a t i o n

2008
春号

- P.1 特集1
団塊世代の地域づくり活動支援フォーラム開催
- P.4 特集2
のじぎくボランティアネット報告
- P.5 紹介します!ボラセンの取り組み
「障害者の余暇活動の充実のために
～余暇活動ボランティアの養成～」
- P.6 NPOと企業
「一協働のポイントをさぐる」
- P.7 広がれ! ボランティアネットワーク
「NPO法人と木材コーディネーターのいい関係」
- P.8 広がれ! V-NET
- P.9 広報力
「NPOのための広報基礎」
- P.10 プラザ通信
「ひょうごボランタリースクエア21」



団塊世代の地域づくり 活動支援フォーラム開催

2月3日(日)に神戸市で開催された、団塊世代の地域づくり活動支援フォーラムの様子をご報告します。

団塊世代の地域づくり活動支援フォーラム開催

団塊世代のセカンドライフの動向に注目が集まる中、地域づくり活動の担い手として団塊世代への期待が高まっています。

ところが団塊世代の地域活動参加などを支援する事業等が人集めに苦戦しています。

それはなぜか？団塊世代のニーズにあった支援策とは何か？

今号の特集では、ひょうごボランティアリーブラザが、平成20年2月3日（日）兵庫県私学会館（神戸市）で開催した「ダンカイ世代の皆様！本音を教えてください！」「団塊世代の地域づくり活動支援フォーラム」の内容と、本フォーラムの企画協力団体を取り組んでいる「団塊世代等地域づくり活動支援NPO等ネットワーク事業」をあわせてご紹介します。

●団塊世代の本音を教えてください。

本フォーラムは、地域でのボランティア活動などを体験したことがない方、退職後の過ごし方を検討中の方、平成19年度に実施した「団塊世代等地域づくり活動きっかけづくり支援事業」※1の参加者、（平均年齢60・9歳（8割が男性））と、行政職員、NPO職員など60人で、シチズンシップ共育企画の川中大輔氏をファシリテーターに迎え、団塊世代の本音を探ることを目的にワークショップをおこないました。

●見えてきた本音

フォーラムでは、個人でワークシートの質問事項にそって意見を記入し、



それをもとにまずグループで話し合いさらに、出された意見をふまえて、具体的な支援プログラムや、効果的なアイデアなどを出し、グループでまとめて発表しました。（表1）

グループからは、収入問題や年金問題など、生活課題に対する意見も少なくありませんでしたが、人生をより豊かに暮らすために地域社会に必要なものとは何か、それは団塊世代支援という枠組みでとらえるのではなく、「住民主体の地域づくり」を考へるべきであるという意見でまとめられました。

しかしながら一方では、地域での活動情報や、地域の現状、活動支援体制が地域住民に見えてこないという課題が浮き彫りになりました。

（表1）ダンカイの世代ぶっちゃけ話

●なぜ団塊世代を対象にした事業に人が集まらないのか、退職後の過ごし方をどう考えているか	
集まらない原因 <ul style="list-style-type: none"> ・ 既存の事業は女性中心 ・ 団塊という枠組みは必要ない ・ ボランティアに関する情報が身近にない ・ ボランティア＝福祉活動のイメージがある ・ ボランティアしている人と接する機会がない ・ 働くこと＝生活の基盤を整えることが最優先 ・ 受身な事業企画が主で面白さにかける ・ 時間的余裕がない ・ 現職時代に退職後に関する情報が少ない 	過ごし方 <ul style="list-style-type: none"> ・ 収入確保のため仕事（パートタイマー） ・ 自由時間＝ボランティアとは限らない ・ やりたことは何かつきつめて考えたことがない ・ 仕事とボランティアが両立できればやりたい ・ 教養を深めること。勉強。（大学に入学） ・ 働いてきた分、ゆっくり過ごしたい ・ 自由なスケジュールをたてて過ごす ・ 趣味を楽しむ ・ 高齢者を社会の資源として活かす仕組みを考へる
●地域づくり活動への参加体験をふりかえり、なぜ事業に参加しようと思ったか、参加してどうだったか、この事業を工夫するとすればどこか	
活動体験からの気づき <ul style="list-style-type: none"> ・ 実際ボランティア体験をしてみて活動のイメージができた ・ 地域の様子に関心がでてきた ・ 先輩や同年代の生き方に刺激をうけた ・ ボランティアの表情がイキイキしている 	工夫点 <ul style="list-style-type: none"> ・ 募集方法の工夫（地域ごと、少人数制、定期的） ・ 事業内容を分かりやすくする ・ 参加しやすい設定づくり（短期、長期、入門、実践） ・ 「夫婦で参加」など参加条件をつけてみる ・ 体験者からの声を聞く機会をつくる
●これからの人生をより豊かに過ごすには、どのような機会や場、支援を求めるか	
仕事との両立 <ul style="list-style-type: none"> ・ 職業の紹介 ・ 有償のボランティア活動 ・ 人材の有効活用の仕組みづくり ・ 地域活動について相談できる場所を紹介する。 ・ 入門講座などステップアップできるプログラムの充実 ・ 人材登録などの活用状況をPRし、役立っていることを地域も活動者自体も実感できるようにする。 	出会い・交流の場 <ul style="list-style-type: none"> ・ 身近に交流できる場をつくるつながりカフェのような出会いがある情報交換の場 ・ 公共施設の開放。 ・ コーディネーターが出会いや、マッチングをサポートする。 ・ 情報提供・広報手段、先の改善 ・ 情報を見つけやすくする。（マスコミなども上手く活用する） ・ 伝え方・説明の工夫が必要。（事業の特色をわかりやすくする）

●本音をうけて、感想

各グループの発表を受けて行政の出席者からは、「今後の地域づくりは、地域やNPO、企業と連携し進めることが必要。そのためにも、中間支援組織やコーディネート機能の役割は重要になっており、中間支援に対するさらなる支援も検討している。また、個々からの労働やボランティア活動など多岐にわたる相談に対してネットワーク型の総合相談窓口の案内なども行っている。しかし、どの事業も情報として届いていなければ、やっていけないことと同じ。発信方法の工夫や、得意な主体との協働などにより改善に努めたい。」とのコメントがありました。

また、フォーラム企画のNPOメンバーからは「私たちNPOは身近な地域課題に即した活動が強みです。運営資金・マンパワーはまだ不足しています。NPO活動の周知や、働くことと社会貢献の機会をうまく創出できれば、新たな協力を獲得できるのではないかと感じました。」と率直な感想が聞かれました。

参加者からは、「同年代の生き方や自分にはない新たな考え方を聞いて刺激を受けた」という感想が寄せられました。人と人との出会いの場、交流の場が個人の人生あるいは地域をより豊かにするものであることを再確認したフォーラムとなりました。

施しました。その中で、団塊世代の退職後の過ごし方として、その多くは地域活動の場に参加してくれるだろうという先入観、期待感がありました。しかし、各団体事業を進めるうちに、広報しても参加者がなかなか集まらない。また、地域活動に入る前の準備セミナーに参加はあっても、実際のボランティア体験に踏み出す方はその半数という現状でした。これらのことから、団塊世代のニーズを明確に把握する事が今後の事業展開に必要と考え、団塊世代の本音を聞くという本フォーラムを企画いたしました。

※1 団塊世代等地域づくり活動
きっかけづくり支援事業
この事業は、ひょうごボランティアリー基金助成を受けて、団塊の世代を対象とした行政、県企画協働課からの提案について、NPOが独自のアイデアを付加し、協働により実施されました。

団塊世代等地域づくり活動支援
NPO等ネットワーク事業
ひょうごボランティアプラザでは、平成19年度「団塊世代等地域づくり活動きっかけづくり支援事業」の実施NPOと、団塊世代への地域活動支援に関する情報交換を目的とし、本会議を7回にわたり実

概要はNPOやボランティアグループ等での「地域づくり」ミニ体験機会等を提供し、新たな仲間づくりや、「楽しさ」と「生きがい」に満ちたセカンドライフを考える一つのきっかけづくりを応援するものです。
(表2実施概要)

(表2) 平成19年度「団塊世代等地域づくり活動きっかけづくり支援事業」の実施概要！

- ① 団塊世代等を対象とした地域づくり活動の体験機会の提供（5日間程度）
- ② ①の活動体験前の準備セミナー
- ③ ①の活動体験後の活動継続に向けたフォローアップ（活動体験発表会や交流会）

実施団体		①地域づくり活動体験 実施内容	②地域づくり活動体験 準備セミナー(各テーマ)	③活動継続に向けた フォローアップセミナー
神戸	(特非)阪神高齢者・障害者支援ネットワーク 代表 黒田 裕子	福祉 ・子育て ・高齢者 ・障がい者福祉 ・高齢者移送 ・外出介助	いつでもどこにいても「自分らしく」生きるためチャレンジし続けよう	意見交換・交流会、フォローアップ研修
	(特非)しゃらく 代表 小倉 譲	まちづくり ・市民活動 ・自治会活動	定年後の歩き方 定年後の10万時間を楽しく過ごすコツがある	交流会 (活動体験の情報交換・会社以外の仲間づくり)
阪神	(特非)ASUネット 代表 磯田 洋一	環境保全 ・里山保全 ・子ども自然学習	街に出よう！ 仲間をつくらう！ 自分を知らう！	活動体験発表、意見交換、団塊の世代「地域デビューパーティ」、団塊世代の自主企画の支援・市民活動体験フォーラム
	(特非)シンフォニー 代表 山崎 勲	防災 社会教育	地域に探す夢の続き	活動体験発表・意見交換、地域づくり活動&キャリア登録相談会
	(特非)場とつながりの研究センター 代表 佐藤 等史	文化イベント、 ITサポート ・パソコン研修	地域で暮らす・地域で遊ぶ・地域を知る	活動体験の発表会
播磨	(特非)明石NPOセンター 代表 野村 明伯		地域活動を体験して生きがいを見つけよう！	交流会（活動団体の紹介・体験談・交流会）、パソコン講座（情報収集やサイト活用方法）

のじぎくボランティアネットワーク報告

《のじぎくボランティアネットワークとは》

一昨年開催された「のじぎく兵庫国体」「のじぎく兵庫大会」で盛り上がったボランティア活動の機運を、一過性のものとせず、継続して地域での活動につなげられるようにと、平成18年度に創設されました。今年度ひょうごボランティアプラザが実施したのじぎくボランティアネットワークの主な取り組みを紹介いたします。

主な取り組み

- ①メールマガジン「のじぎくV-NEWS」の発行
県内のボランティア募集情報やイベント情報を掲載
- ②フォーラムの開催（2回）
ボランティア活動に関する意識啓発

《大会でのボランティア活動、

成果・課題はどのようか？》

大会後1年を経過した平成19年11月8日（木）に第1回目のフォーラムを開催しました。要約筆記

ボランティア活動者やそれを支える行政、そして知的障害者フットベースボールの監督、それぞれの立場から大会当時のボランティア活動の成果と課題をお話いただきました。ボランティア活動については、要約筆記と手話通訳との連携によって、障害者だけでなく参加者全員に充実した情報支援が行えたことや、大会を通して数多くのボランティアが障害者と関わりをもつ機会となったことなどが成果として挙げられました。課題については、参加者から「もっと個人の持ち味を出せる工夫を」と意見が出され、活動者の意欲を活かす大会運営について白熱した議論が交わされました。

最後に、大会時のボランティア活動に関する課題を教訓に、行政も巻き込みながら、一人ひとりが自発的に市民社会を創りあげていく姿勢を持ち続けることを確認しました。

《次のステップに向かう》

ボランティア達

平成20年1月26日（土）に開催した第2回目のフォーラムでは、兵庫県の中間支援組織のリーダーである中村順子氏（NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸理事長）が講演されました。講演では、社会には企業セクター・行政セクターに加えて非営利市民セクターが存在し、その中には自治会やボランティアグループ、NPOなど多様な主体や活動形態があることを紹介いただきました。

び、取り組みを阻む要因や大切にしたい視点について議論がなされました。

1回目のフォーラムで、ボランティア活動の原点“自発性”の大切さを確認するとともに、実際にこれから自分達には何ができるのかを考えた2回目。のじぎくボランティアネットワークを通じた交流を契機に、これらのことを参加者同士で議論・共有できました。

続いて行われたグループワークでは、参加者が「介護予防」や「ボランティア活動者の開拓」という、

今後取り組みたいと思うテーマを選



地域の課題を解決したいと参加者が発表
(2回目のフォーラムの一幕)

メールマガジン「のじぎくV-NEWS」の登録はこちらから↓

<http://www.hyogo-vplaza.jp/>

※ホームページではボランティア活動に役立つ情報やイベント情報、支援機関も紹介しています。

是非ご活用ください！

紹介します

ボラセンの取り組み

障害者の余暇活動の充実のために 余暇活動ボランティアの養成

当事者の願いから

「買い物に行きたい」「映画を一緒に楽しみたい」
こうした当たり前の願いの実現に向け、朝来市ボランティア市民活動センター（以下、「ボラセン」）が「余暇活動ボランティア講座」を始めたのは2年前のことです。

きっかけは「月に1回でもいいからプールと一緒に遊んでもらえる人はいないか」という障害者の親からの相談でした。ボラセンは、在宅介護支援センターや作業所に相談を持ちかける一方、公的支援だけではなくボランティアが関わることもっと豊かな人間関係づくりと余暇活動の充実が図られるのではと考えました。しかし、障害者の余暇活動を支えるボランティアグループは市内にほとんどなく、また作業所に通う障害者とみると、休日にレクリエーションや社会活動のために外出する方は少ない状況でした。相談者一人の問題ではないと考えたボラセンは「余暇活動ボランティア講座」を企画しました。平成18年度に開催したこの講座には10名の市民が参加し、デイキャンプなど体験活動を障害者とともに行いました。

気づきを共有してグループ化へ

平成19年度は、7月から8月にかけて全5回の「余暇活動ボランティア講座」を開催し、13名が参加しました。体験による気づきを重視し、作業所の利用者との余暇を一緒に楽しむプログラムを設定しました。講座最終日には、講座で気づいたことを話し合いました。「障害者に対する接し方や考え方が変わった」「介助という大げさなものではなく、少しの支えだけで良かった」という感想が出されました。少しのサポートで障害者ももっと生活を楽しむこと、障害の有無に関わらず誰もが生活を楽しむ権利のあることを確認しました。

その後、活動の継続について話し合わせ、講座修了者によるボランティアグループ「いい余暇ん」が誕生しました。現在、作業所と密着した活動を行っています。年末にはある作業所が行うトーンチャイム*の演奏に、余暇ボランティアと作業所の利用者が一緒にチャレンジ。ともに練習を重ね、大成功のうちに終えました。当事者とボランティアが練習の成果を多くの市民に披露するとともに、一つの成功体験を共有することができました。

支援の輪を広げるために

ボラセンは、ボランティア養成だけをゴールにせず、誰もが地域で当たり前に暮らすことへの理解と支援を、より多くの市民に広げる取り組みを行っています。たとえば「余暇活動ボランティア講座」は、学生・生徒が参加しやすいよう夏休みに開催し、5名の高校生が参加しました。このように学校の福祉学習と関連づけることで若い世代の育成を図っています。また、広報紙や社会福祉大会での広報・啓発など、さまざまな機会を通して余暇活動ボランティアの意義を伝えていきます。

今後、余暇活動の選択肢を広げるためにさまざまな関係機関との連携を広げるとともに、小地域での福祉学習を推進し、障害者の余暇活動や地域での自立生活について考える場を地域の中につくる予定です。

※トーンチャイムとは、アルミ合金製のパイプをたたいて共鳴させるハンドベルに似た楽器



みんな一緒だから楽しい!!
余暇活動ボランティア講座の一コマ

朝来市ボランティア
市民活動センター

〒669-5152 朝来市山東町楽音寺118
山東老人福祉センター内
TEL 079-676-5215 FAX 079-676-4665
URL <http://sasayuri-net.jp/users/asago-sishakyo/top.html>

ボラセン職員から一言！

講座をとおり、「障害者だから何も出来ない存在」ではなく、「障害者だから何も出来ない存在」という事を改めて学ばせてもらいました。周囲の理解やサポートがあればもっと豊かな余暇生活が送れるという証明ではないかと思えます。

余暇生活支援はボランティアのグループ化で終わりではありません。今後理解と協力の輪を広げていくことが必要です。近い将来、休日に買い物を楽しむ障害者とボランティア（友人）という姿が市内で頻繁に見られるよう頑張っていきます。



今回は
【朝来市】

協働のポイントをさぐる――

2007年度NPO大学から

ひょうごボランティアプラザでは、関係機関や団体と協働し、NPOの人材育成に資するためNPO大学事業を実施しています（詳細は本紙11号）。今年度もNPOのマネジメントに役立つ実践的な講義・演習を実施しましたが、本号ではその一部を紹介します。

内容は、株式会社アシックスでCSRを担当されている田ノ岡義純さん（管理統括部法務部CSR推進チームマネジャー）が『NPOと企業――協働のポイントをさぐる――』と題し講義されたものを、ひょうごボランティアプラザでまとめたものです。

私は、企業のCSR部門で仕事をし、今まで、たくさんのNPO（注1）から様々な要請を受けてきました。こうした経験をもとに、NPOが企業と協働する際に、どのようなことに注意すれば良いかお話しします。

①まず、要請、依頼の相手となる企業のことを事前によく調べてください。協力を依頼する内容が、企業の関心を持つていること、企業の活動してきた延長線上にあることであれば、相手の懐に入りやすいといえます。私の経験では、お互いが困っていることなら連携が可能です。通常なら競争関係にある企業同士であっても、課題解決のため協働することがあります。

②次に、企業や企業担当者のおかれている状況を知ってください。ある程度の規模の企業が組織として決定するには、内部での承認手続きが必要で、時間もかかります。企業としては、株主も含めた利害関係者（ステークホルダー）に説明する責任を負っているからです。社内では、担当者が役員などに説明し、決定していくわけですが、説明資料は簡潔でわかりやすいものでなければなりません。こうし

た資料も、NPO側が提供すると企業担当者の負担が軽減します。また、皆さん方のNPOが今までどんな活動をしてきたのか一目でわかるもの、例えば、事業概要の冊子やホームページなどがあるといいでしょう。このような資料は、求められたときにすぐ出せなければ意味がありません。普段から、まとめておくことをお勧めします。

③さらに、事業が終了したら、実績報告を企業に出してください。冊子形式でも結構ですが、写真やビデオで活動状況を報告するというのも効果的です。要は、時機を逃さず的確な報告をすることが大切です。状況によっては中間報告も必要です。また、会計報告は、事業終了後速やかに行う必要があります。もし、繰越金が出れば、それを次の活動にどのように使うのか示してください。こうした報告をきちんと積み重ねていくことで、次の協力を受けることにつながっていきます。

④それから、協働する事業は、その実績報告において企業が参加、協力したことがはっきり残るものであることが望ましいでしょう。先ほども述べましたように、企業は、各種

のステークホルダーに対して説明する責任があるからで、皆さん方の報告は、そのための貴重な記録にもなります。

⑤重要なことが最後になりましたが、企業がNPOとの協働を決める際には、そのNPOの名前を聞いたことがあるか、NPOの支援団体に著名な企業・団体が入っているかということが大きな要素となります。あるいは、決めるかということが大きな要素となります。あるいは、決める手についてもいいかもしれません。

NPOの名前を聞けば、どんな活動をしているのか企業担当者に思い浮かべてもらえるくらいであることが望まれます。こうした状態になることは、すぐに出来ることではありませんが、普段からの地道な活動の延長線上にあることで、特別なことではありません。

そもそも企業ならば、こうした活動は、常に事業・経営として取り組んでいることです。昔は、テレビ広告をどんなに出したり、人気番組のスポンサーになることで知名度が上がり、それが企業ブランド力として定着していました。しかし、今は、企業の財務力、技術力、コミュニケーション力が必要で、それがブランド力と一体化しないと効果を発揮しません。NPOにおいてもブランドを高める活動、マーケティングに注力することが、そのNPOの発展につながると言えるでしょう（注2）。

（注1）この講義では非営利の市民活動団体の意味で使われています。

（注2）当日の講義では、企業が実際に行っているマーケティング活動についても事例をあげてわかりやすく説明されました。また、受講者は、NPO大学全体を通じて、SWOT分析、BSCなど経営計画を立てる際の手法を学びました。

「まち」と「もり」が持つ資源を循環

(特)「コミュニティ・サポートセンター神戸」

●「まち」と「もり」の連携

特定非営利活動法人「コミュニティ・サポートセンター神戸」(以下、CS神戸)が都市と農村の交流促進事業をはじめたきっかけは、平成17年に開催された「たんば・田舎暮らしフォーラム」への参加でした。フォーラムで、「定住はできないが、自然に触れたい」というまちの住民の希望と、「安全な農作物を広めたい」という農村の住民の希望を知りました。

●協議会の結成

森に降った雨は森の栄養分を含んだ地下水となり、川となって田畑の作物を潤らせ、海に流れ込み魚介類を育てます。森が枯れることは田畑や海が荒廃することなのです。そこで採れるものを食べる「まち」の住民の食糧問題にもつながります。

「まち」と「もり」が交流することによって「まち」の住民が自然を理解し森の再生を手助けすれば、共生循環型のまちづくりが出来る。そう考えたら団体「もり」の農業者グループ、製材所、木材コーディネーターと「まち」のCS神戸、都市と山村を結びたいが「まち」と「もりの生活アトリエネットワーク協議会」を結成し、交流プロジェクトを開始しました。

●丹波を体感、そして関わる

CS神戸が「まち」の窓口となり、ひよつこボランティアプラザの助成



丹波市氷上町井中にて 堆肥作り

特定非営利活動法人
コミュニティ・
サポートセンター神戸
理事長 中村 順子
〒658-0051
神戸市東灘区住吉本町2-13-1
森田ビル3階
TEL 078-841-0310
FAX 078-841-0312
E-mail info@cskobe.com
URL http://www.cskobe.com/

金によって、平成18年度から丹波で農業や木工を体験する「体感ツアー」や丹波の住民を神戸に招く「ミニフォーラム」など、数回のイベントを開催したところ、「まち」「もり」双方に「ズヤ期待が高いことが分かりました」。

そこで平成19年度は「まち」が「もり」に買って関わる取り組みとして、神戸での講義と丹波での実習を半年間で25回行う講座を開催し、文化や農業のほか、「もり」の伐採から植林に至るまでについても学びました。

講座には、レジャーを満喫したい受講者がいる一方、もっと深く「もり」と付き合いたいと思う人も出てきたことから、平成20年度はこれまでの事業と並行して、CS神戸は自然の豊かさや人間の生活の質をも向上させるための講座を開始しました。

このプロジェクトによって「まち」と「もり」は、着実にその循環を確かなものにしていきます。

丹波は神戸、阪神間から車で約1時間半。人や地域資源をネットワークし、新しいライフスタイルづくりをするには、程よい遠さです。

NPO法人と木材コーディネーターのいい関係

「まちともりの生活アトリエネットワーク協議会」構成員のひとり能口さん(木材コーディネーター)にお話をうかがいました。

Q 引っ越し丹波で仕事を始めたのはなぜ?

A 14年ほど前に丹波に移住した頃は、自然環境の豊かな所で暮らしたいとの思いだけで、とりあえず求人あつた製材所に勤めました。当初はのんびりと仕事をしていたのですが、山の木を伐り、建築の材料に加工する工程を経験するうちに、林業の厳しい現状に直面しました。そして、新たな木材流通の必要性を感じていた時に、同じ考えを持つ一級建築士と出会い、4年前に有限会社ワッツを設立しました。建築の設計と木材コーディネーターを同時に行うことで、地域の森づくりと家づくりを直結させ、持続的な森林資源の活用を目的としています。丹波の地は都市に近い木材生産地です。この環境だからこそ、今の仕事が出来ののかもしれない。

Q 協議会での役割は?

A 「もり」側の事務局をしています。移住者として、まちともりの生活の両方を経験していることを活かし、交流活動が、「お客様さん」としてではなく、もう一歩踏み込んだ関係になるように、調整役を担います。

Q 「もり」が「まち」に響かせたのは?

A 丹波は7割が山林で残り3割のうち半分が農地です。人口は減少傾向にあり、農地や山林は後継者が減り維持することが困難な状況にあります。地域「コミュニティ」の活力はまだ健在です。丹波では、自然環境や文化を継承するためにさまざまな地域活動が行われています。また、「まち」との交流により地域に新たな活力が生まれています。そのような交流事業に参加していただき、丹波を「第一のふるさと」として、地元の人との心のつながりができれば、それに越したことはありません。

(取材:地域活動コーディネーター 高村 有子)

NPOのための広報基礎

効果的な広報には、表現内容の吟味も大切ですが、どのようにしたら情報が伝わるのか、そのルートから考えることが必要です。

「作っただけ」にならないために

広報（コミュニケーション）には、様々なツールがありますが、メディアによって考えるべきポイントは異なります。新聞・テレビといったマスメディアを通じた広報と違い、NPOで使う機会の多い、団体のパンフレットや会報、活動のチラシ、WEB上のホームページ（ブログも含む）による広報では、ターゲットが自分達のメディアまで辿りつく道を確保するところから始める必要があります。そうでなければ、必死の苦勞で作り上げたチラシも、ホームページも、ただ「作っただけ」になってしまいます。

たとえば、ひょうごボランティアプラザにこんな相談がありました。

中高年の男性を中心とした、子育て支援グループで、若いお父さん向けに「父親も一緒になった子育ての啓発セミナー」を行っているが、あまり参加者が集まらないとのこと。

よくお話を聞いてみると、募集はプラザなどの自分たちが登録している支援センターや自分たちの知っている範囲にチラシを手渡しや設置しているだけということでした。

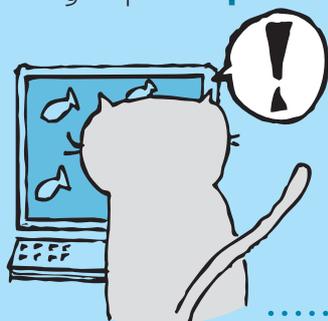
しかし、プラザなどの支援センターには、普通若いお父さんが多くは来られません。あまりチラシの効果は期待できないでしょう。

方法はいろいろありますが、例えばお母さんを経由して見てもらうことを狙って、保育園や幼稚園、子育て支援センターと関係がつながった上でチラシを置かせてもらう等ですれば、一定の効果が見込めます。

チラシのレイアウトや文面といった「見られてからの話」をするより前に、まずどこでなら一番見てもらえるのか、どんな形のアプローチが一番興味を引けるのかを考えることが必要です。

目につきゃすいホームページって？

今、どの世代でもインターネットを利用する時代になりました。



今後、NPOの広報への活用もますます重要になってくるでしょう。

しかし、膨大な情報の山から求めるモノに辿りつくためには、Yahoo!やGoogleといった検索サイト（エンジン）を使いこなす行為が欠かせません。

そして、検索結果で情報を求める人に適切な情報がより上位に現れるようにウェブページの工夫が必要な場合があります。

そうしなければ、自分の団体に興味が湧いた人が団体名で検索したときに、順位がとも後ろの方に表示され、情報を求めている人がたどり着けない事態も起こりえます。

それらの技術や行為は、SEO（検索エンジン最適化）と呼ばれ、様々な技術や手法があるといいますが、検索エンジンのランク付けの仕組みは頻繁に変わりますので、地道にコンテンツを充実させて認知を広げていくのが最も近道です。

手法や技術に興味がおありの方は、様々なマニュアルサイトや本、専門業者がありますので、こういうものこそ「検索」してみましよう。

8th ひょうボランティアスクエア2!

1月26日(土)、27日(日)に、コープこうべ生活文化センター(神戸市東灘区)で8回目を迎えたスクエア21が開催されました。

「ボランティア・市民活動元気アップアワード」では、フードバンク関西(芦屋市)が元気アップ大賞に選ばれました。「ひょうごボランティア・市民活動フォーラム」では、グループディスカッションのまとめとして出現した“資源の木”に会場がどよめく場面も。「ふれあいマーケット」では、東灘区自立支援協議会の各作業所の皆

さんが日頃の活動をPRしながら商品を販売しました。

また、スクエア21実行委員会の主催事業以外にも、「第2回のじぎくボランティアフォーラム」・「セカンドライフフォーラム」・「県民ボランティア活動賞表彰式」・「企業・NPO協働奨励事業表彰式」・「震災メモリアルコンサート」・「阪神淡路大震災メモリアル展」が開催され、まさにボランティア活動のスクエア(ひろば)に様々な方がつどい、交流を深めました。

※詳しくはプラザのホームページをご覧ください。



にぎわうふれあいマーケット



フォーラムの成果は3メートル余の“資源の木”



こつこつ大賞に輝く兵庫県難聴者福祉協会

ボランティア・市民活動災害共済の制度変更のご案内

関連法規の改正により、平成20年3月31日(月)をもって、現行の死亡見舞金(50万円)の運営を終了し、新たな死亡見舞金(10万円)を平成20年4月1日より開始します。

現行の死亡見舞金(50万円)の請求については、給付金支払事由の発生の日から起算して2年以内に行ってください。

お知らせ

○ひょうごボランティアプラザの移転について

ひょうごボランティアプラザは平成20年3月2日、神戸クリスタルタワーの10階から6階に移転致しました。また、新年度から開館日・時間等を変更致します。ホームページ等でご確認ください。
<http://www.hyogo-vplaza.jp>

○コラボレーションの休刊について

「コラボレーション」は本号をもって休刊させていただきます。これまでご愛読いただきました皆さまに厚くお礼申し上げます。

今後は、プラザのホームページやメールマガジン「コラボNEWS」(利用登録はプラザホームページから)等を中心に、ボランティアに関する情報を発信していく予定ですのでよろしくお願い致します。